

伊是名島の陶器について  
—白釉獅子香炉とふれあい民俗館所蔵品の紹介—

篠原 あかね

Potteries of Izena Island

Akane SHINOHARA

伊是名島・伊平屋島総合調査報告書、沖縄県立博物館・美術館 別刷

2019年3月15日

Reprinted from Survey Reports on Natural History, History and Culture of  
Izenajima and Iheyajima Islands, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

March, 2019

## 伊是名島の陶器について — 白釉獅子香炉とふれあい民俗館所蔵品の紹介 —

篠原 あかね\*

Potteries of Izena Island

Akane SHINOHARA

### はじめに

今回の総合調査では、2017年3月14日～16日および2018年10月16日～17日の日程で伊是名島を訪れた。目的は伊是名島内にある陶磁器の調査である。島の歴史については他稿で述べられているのでここでは詳述しないが、伊是名島には王家の祭祀を司る銘苅家伝来の陶磁器コレクションがあり、これらは琉球王国時代から現代まで続く公事清明祭で使用されている。また銘苅家には古文書も伝わっており、美術工芸資料と文字資料を併せて比較・検討することができる点で非常に貴重である。銘苅家伝来の美術工芸品については、既に報告されている<sup>1</sup>ので今回は2017年に新たに発見された香炉<sup>2</sup>の報告と、伊是名村ふれあい民俗館（以下、同館）所蔵の陶器について簡単に紹介する。

### 銘苅家旧蔵品と新たに発見された香炉

王家の祭祀を執り行った銘苅家には、陶器や漆器、染織品など様々な美術工芸品が首里王府から拝領品として贈られている。銘苅家旧蔵の陶器は、18-19世紀の壺屋で作られたと考えられる施釉陶器が主だが、中には薩摩焼も含まれている。これらは琉球王国時代から現在まで続く伊是名玉御殿の清明祭で使用されており、その概要は旧銘苅家資料の古文書からも窺い知ることができる<sup>3</sup>。中でも『玉御殿御道具帳』<sup>4</sup>は、1870年に伊是名側から首里王府へ清明

祭に必要な道具類の報告をした目録である。銘苅家旧蔵の陶器の一部もこの目録に記載されており、製作年代がうかがい知れる伝世品として非常に貴重である。

白釉巴紋獅子紐三足鼎形香炉  
総高26.5cm、口径13.7cm



図1 蓋正面



図2 蓋裏



図3 身



図4 白釉巴紋茶家 部分拡大

本作は銘苅家が所蔵していたものだが、その存在が知られておらず、2017年に発見されて伊是名村に寄贈された。現在は修理のため当館へ寄託されている。鼎の形をしており、破損しているが、左右には耳がついていたと考えられる。足は獣面で、香炉の正面には尚家を表す三つ巴紋が描かれている。紋の左右には陰刻で牡丹唐草が彫られ、格式高い作品になっている。蓋も破損しているが、摘み部分は玉取り獅子を表していると考えられる。獅子の周囲3箇所に三つ巴紋が透し彫りで表現されている。本作のような磁器は琉球国内では生産されていないため、国外からの輸入品であると考えられる。類例として、銘苅家旧蔵品の中の白釉巴紋茶家（図4）がある。釉調がよく似ており、共通した特徴を持つ。白釉巴紋茶家は『玉御殿御道具帳』の記載から日本製とわかっており、先行研究では薩摩焼と推測されている<sup>5</sup>。本作も器形や装飾の特徴から薩摩焼であると考えられる。

### 伊是名村ふれあい民俗館所蔵の陶磁器

伊是名村教育委員会の大城正泉氏によると、同館の陶磁器は今までに詳細に調査されたことがないとのことだったので、悉皆調査的に写真撮影・測量・目視による観察を行った。調査を通して、旧銘苅家資料に並ぶような陶器の発見を期待したが、同館の収蔵品は各家庭で貯蔵用として使用されていた実用品がほとんどだった。陶器の所蔵数ははっきり把握していないとのことだったが、今回筆者が確認した限り100件弱なのではないかと思う。（図5）今回は明らかに昭和以降の作であるものを除いて、45点の調査を行った。荒焼の甕や油甕は同種のものが

複数あったので、代表的な資料11件のみを表にまとめた。（221頁参照）

大半を占める荒焼壺および荒焼甕は赤みのある土の焼締めで、ろくろ引きで成形されている。窯場が壺屋に統合される以前に作られた荒焼も含まれていると考えられる。高さ30～40cmのものが4点、40～65cm前後の大型のものが13点確認できた。上焼は数自体が少なかったが、主なものとして黒釉の嘉瓶があった。飴釉の嘉瓶もあり、18～19世紀に壺屋で作られたと考えられる。



図5 展示室の風景

### 今後の展望

銘苅家伝来の陶磁器コレクションは、古文書の記載と照会することで製作年の下限や製作地がわかる点で基準作になり得るものであるが、今回の反省点としては、調査した資料の紹介に止まってしまう、どのような経緯および経路で伊是名村に伝来するのかがまで深く考察することができなかった。今後の課題としたい。

#### 〔脚注〕

- 『伊是名村銘苅家の旧蔵品および史料の解説書：公事清明祭をめぐる公文書とご拝領の品々』伊是名村教育委員会 2007年
- 土井菜々子氏のご教示による
- 翻刻され、前掲1に掲載されている
- 文書の末尾に「牛（1870年）8月」とある。前掲1の93～95頁に翻刻されて掲載されている。
- 前掲1 48頁

番号	画像	名称	口径(cm)	高さ(cm)	装飾／釉薬	所見
1		黒釉嘉瓶	14 (口縁部が欠けているので最大径を計測)	29	黒い釉薬をかけて焼成した上焼の嘉瓶。	口縁部が欠けている。製作地は壺屋か。
2		黒釉壺	5	12	黒い釉薬をかけて焼成した上焼の壺。	口縁部が欠けている。製作地は壺屋か。
3		荒焼壺	13.7	32.5	肩に帯状の線	赤みのある土。口縁部と胴の一部に欠けあり。
4		荒焼壺	12.2	36.6	首に6本、肩の上に1本刻線を引く	漆喰で割れを修理している。
5		荒焼壺	15.6	39	肩に1本刻線を引き、丸い脚を3つ付けている	外側全面と内側は首の半ばまで部分的にマンガ釉をかけて焼締めている。
6		荒焼壺	9	34	首と肩に刻線。胴の中央に縦書で文字が書かれているが「田行」以外は判読不能。	口縁部は一部欠け。首に紐が結ばれている。

番号	画像	名称	口径(cm)	高さ(cm)	装飾／釉薬	所見
7		黄釉椀	8.8	9.5	施釉した後、口縁部に二重線を引く。素地に白化粧を施し、施釉している。釉薬は茶色と黄色を呈している。	産地不明。
8		上焼甕	18.2	19.2	飴釉で施釉した後、灰釉を流しかけて装飾している。	県外産か。
9		南蛮甕	16	27.6	全体が施釉されるが、ろくろの後、叩いて締めたような跡がみられる。	およそ200年前に所有者の祖先が首里から持ち帰ったという。分厚く重たい作りになっている。
10		南蛮甕	22	40.5	8の南蛮甕と同じく、全体が施釉されるが、ろくろの後、叩いて締めたような跡がみられる。	寄贈者が真手茶原海岸で発見したという。昭和62年に寄贈。
11		油甕	13	28.5	4つ耳付きで、飴釉で施釉されている。	「アンダーガミ」と呼ばれる甕の典型的な陶器である。